

王の太子は阿闍世である。彼は提婆達多と共に謀して釋尊に迫害を加へたことは有名であるが、彼がどうして仁愛の深い父を殺したかについては、從來提婆にそのかされただの、前生の仙人殺害の話などが傳説として傳えられてゐるが、それは餘りに根據が薄弱で信じ難く、私はそれより阿闍世が摩訶陀の最重要の所領の一であるチャンパーに重税を課したことを痛く叱責され、それを恨みにもつての所業とする有部破僧事の説が肯綮に値すると思ふものである。この阿闍世が即位して大王となるのであるが、彼も亦即位後改信して熱心な佛教外護者となつた。王の改心については涅槃經梵行品等の説に依り、從來はその業病がもとのやうに傳へられてきたが、これも餘りに簡單すぎる。有部毘奈耶樂事では、王の暴虐を聞いて諸國王が兵を擧げて王舎城に亂入したこと、又その時王舎城に稀に見る飢饉大水降雹惡疫流行等があつて、喪車相次ぐ有様であつたので、王も遂に屈服して、大臣を使として佛を迎へたことが記されてゐるが、此の方が遙かに自然である。王はその子優陀夷跋陀羅に殺

されたので、遂に印度統一を實現する事ができなかつた。

拘薩羅國は西方の雄で、釋尊の母國迦維羅衛の城も、その歴史の古く尊いことを誇つてはいたが、當時は既に拘薩羅國の大王波斯匿の勢力下にあつた。王は迦尸及び拘薩羅を領有した仁王であつたが、晩年その大臣に叛かれ、その子琉璃太子の叛逆があり、その都舍衛城を脱して、東方王舎城の阿闍世王の援助を求めたが、氣の毒にもその城外にたどりついた時疲勞の餘り斃死したのである。王の妹コーサラ皇后は頻婆娑羅王の夫人で、この皇后が嫁にゆく時、その化粧料として迦尸の國を摩訶陀に割讓したことがあり、その後阿闍世が王舎城でクーデターを起した時、王は之と戦つて、之を擄にしたのであるが、再び之を許して、その女金剛を與へ、迦尸の地を還してやつた因縁があるからである。拘薩羅國の琉璃太子は、舍衛城のクータターに依つて王位に即いて大王となり、一方又その私怨のあつた釋迦族を討伐して滅したが、拘薩羅國の不安は増すばかりであつた。即ち内亂はその後も續き、業火は突然舍衛

城をなめた。王は驚いて火を海上に避けたが、その船も亦燃えたので王は船上にて、その船と共に焼け死んでしまつた。それは釋迦族滅亡後僅か七日のことであつたといふことである。

この外當時の大國として知られるものに跋蹉、跋耆がある。跋蹉の都は憍賞彌で、その王優填は最初に佛像を造つた人として、佛教史上有名である。跋耆はミチラーを都とするワバニヤット以來強大であつた毘提婆族と、當時珍しくも共和國であつた毘舍離を都とする離車族とに分れてゐた。毘舍離は維摩居士の説話及び佛滅百年後の十事の非法で有名である。そこは王舎城と舍衛城間の交通の要衝で、風俗華美、市勢繁昌を以て知られた。

尙當時の國際間の摩擦、天災地變、經濟關係についても述べたいのであるが、紙數の都合上、何れ又他の機會に述べて見たい。今はただ問題の所在のみを點描しておく。

## 第二十二願の事義

加藤 智學

『無量壽經』所説の四十八願の第二十二、必至補處の願の專義に就て、論究せねばならぬ事がある。一他方の佛土の諸の菩薩衆、我が國に來生して、究竟して必ず一生補處に至らん」とあり。「究竟して」と云ふならば、「必ず佛果に至る」と云ふてもよいわけであるが、「一生補處に至らん」と云はれてゐるのは如何なるわけであるか。一生補處は等覺の位で、一生にして前佛入滅の後その處を補ふ菩薩の最上の道位である。釋迦牟尼佛入滅後の補處の居士は彌勒菩薩、阿閼佛入滅し給はゞ乾陀訶提(香象)菩薩が補處成佛すると、説かれてゐる。大『阿彌陀經』や『無量清淨平等覺經』には、阿彌陀佛の壽命は極めて長く、無央數劫、無央數劫、入滅し給はず、其の然る後に入滅し給はゞ、蓋樓亘(觀世音)菩薩、補處成佛し給ふと、説かれてゐる。されば、阿彌陀佛國に於ける一生補處の菩薩の第一は觀世音菩薩である。その次の補處の居士は大勢至菩薩、かうした一生補處の菩薩「その數甚だ多し」と小『阿彌陀經』にも説かれて居る。されば、此の第二十二願の願事によれば、阿彌陀佛國

へ往生したる菩薩は、究竟して、觀世音・大勢至等の一生補處の居士と同等の道果を得る。一佛國には、二佛並存せず、時を異にして多佛出世すれども、一國土に同時に二佛三佛の出世すること無し。主莊嚴は一佛のみにして、伴莊嚴は幾多の菩薩・聲聞等である。されば、阿彌陀佛國に往生する菩薩は、究竟して一生補處に至る。内證は大般涅槃を悟得しても、妙覺の極果に登らず、從果降因して等覺補處の位にて存在する。若し成佛して一國土の法王たらんと欲すれば、他方無佛の世界に出現して成道して衆生を利濟する。『無量壽經』の異本には、梵本にも、譯本にも、阿彌陀佛國の菩薩の他方成佛・異方成佛が説かれてゐる。かくて又この第二十二願には、除かれたる願事がある。それは『摩訶般若波羅蜜經』等の幾多の大乗經典に説かるゝ菩薩の行相であつて、一佛國より一佛國に生じ、一國土より一國土に往して、諸佛を供養し、衆生を教化して、自行化他の功德を積累する大乘の修行である。かゝる修行の菩薩は、無量劫一處に止住するものではない。土地の菩薩とも爲れば、變易

生死の自在を得て、命終して何れの國土へでも轉生して往く。かうした菩薩が阿彌陀佛國へ往生したとすれば、無量無數劫止住して此の國土に於て前佛の滅後に補處する者ではないから、之を除かねばならぬ。第二の不更惡趣の願には「命終の後」とあり、第十五の眷屬長壽の願には「其の本願にて脩(長)短自在なるを除く」とある、此等の專義を参照すべきであらう。されば『淨土論註』下<sup>十三</sup>には、「又彼の壽命を捨て、餘の國土に向はんと欲し、脩短自在、願に隨つて皆得」と、云はれてゐる。壽命、長短自在であるから、命終して去る者があることを想はねばならぬ。一生補處の梵語は *Ekajati-tiprabaddha* である。Ekajati は「一生」、*tiprabaddha* は繋と譯せらるゝ語で、「一生所繋とも一生相續とも翻譯されて居る。一生その國土に存在して他土へ轉生せざる菩薩の名稱である。かゝる菩薩ならば、その國土に於て一生にして補處成佛する。大乘の初期には、佛の三身は思想せられず。無著・天親の時代に至りて三身説あり。初期には、有始無終の報身を思想せず、法身と色身(有始有終)」と

の二身、『般若經』に説かれてゐる。三十世十方の諸佛みな成道の始め有り入滅の終り有るものと思せられてゐた。大『阿彌陀經』等に佛の入滅と菩薩の一生補處を説けるは、大乘初期の經典なるが故である。

### 『西方指南鈔』の 教理史的地位

雲村 賢淳

先づ、『西方指南鈔』の編述の意趣をさぐり、次に、従來は『愚禿鈔』が『選擇集』との關係に於て論ぜられたのを、こゝではそれに對して『指南鈔』に於ける元祖の仰せと、『愚禿鈔』に於ける愚禿の心境との間に深き關係が存することを求め、その間に於ける教理的關係を確めようとするのが本問題のねらふところである(『愚禿鈔』と『選擇集』の關係、『愚禿鈔』の教理史的地位の問題省略)。

而して『指南鈔』の内容はその多くは漢、和、拾遺の『語燈錄』其他に収録されてゐるが、特に本書にのみ収録された左の數條が特に注目に價する。

#### 一、第五條 十七條法語

- 二、第十一條 三機分別
  - 三、第十三條 四箇條問答
  - 四、第廿一條 淨土宗大意
  - 五、第廿二條 四種往生
- その中に於て特筆すべき事項は
- 1、横豎二超の教判
  - 2、三々の法門は出てゐないが、三經差別、眞假分別の素地あること。

3、往生の業事成辨について平生、臨終に分ちしは、宗祖の即、便二往生に展開すべきこと。

已上の如きは『選擇集』には未だ出て來ないことであり、むしろ『愚禿鈔』に於ける宗祖教義との關連性が多い。斯くの如く、『指南鈔』の中の數章は、少くとも『選擇集』に於て未だ見ざる教義が『指南鈔』に於て語られ、それが『愚禿鈔』の中に愚禿の了解として述べられたのであらう。

惟ふに、元祖に於ける『選擇集』、宗祖に於ける『教行信證』は立教開宗の書として相對批判の書であり、これに對して、元祖に於ける『指南鈔』の中の數章、宗祖に於ける『愚禿鈔』の如きは絶對信仰を表白せる書ではないか。この意

味に於て、『選擇集』に對する了解は『指南鈔』の了解を通してこそ、如實に了解され、その了解を承けて『愚禿鈔』となり、こゝから更に相對批判に出で、『教行信證』の選述となつたのではなからうか。かく教理史的に跡づける時、『西方指南鈔』は改めて、その學的價値を再認識すべきではなからうか。詳細については改めて筆を取りたいと思ふが、こゝに大方諸師の叱正を乞ふ次第である。

### 大乘戒觀の建立

西本 龍山

一、菩薩比丘の提唱。菩薩と比丘とを單稱して大乘・小乘と對立せしめてをるが、菩薩比丘と連呼して大小融會の境を示すことは従來の學界に知られてゐなかつた。大正七年、比丘の行類相親たる聲聞律藏の研究は一往習得したが、菩薩の行類相親については迷霧裡に彷徨してゐた。恩師北川僧正は「通別二受、僧體を成ず、興隆佛法是れに由りて始まる」との照遍和尚相傳の文を示されて、日本佛教は菩薩比丘の自覺に立つべきであ